

## 2009年度 社会学部優秀論文賞（安田賞）講評

選考委員代表 宮 原 浩二郎

本年度は、社会学部優秀論文賞（安田賞）候補論文として、7篇（8名）の卒業論文（社会学科5篇、社会福祉学科2篇）が、研究演習担当者から推薦された。6名の委員からなる選考委員会は、それぞれの候補論文について、慎重に選考を行った。選考に当たっては、①主題の重要性、②方法の妥当性、③分析・考察の的確さ・周到さ、④結論のもつ重要性、などに留意しながら審査を進めた。その結果、1篇（1名）に最優秀論文賞を、4篇（4名）に優秀論文賞を、2篇（3名）に佳作を、それぞれ授与することとした。教授会にて承認され、卒業式には授与式を行った。

ここでは、最優秀論文賞を受賞した、美馬里彩さんの卒業論文「終末期の子どものスピリチュアルニーズ～ソーシャルワークの視点から家族へのケアを含めたトータルケアを目指して～」について、詳しくは指導教員の推薦文に譲るが、若干ふれておきたい。

この論文は、迫り来る死を意識した子どもたちが、人間存在と生命の根底にふれ、周囲の大人たちを厳粛な清澄さで包み込んでしまうような、もの深いスピリチュアリティを表出することがあることを、関連文献の精査と質的調査を通じて明らかにしている。子どものスピリチュアルニーズという、臨床実践の現場においてもアカデミックな研究においても容易に焦点化できなかった問題に、正面から果敢に取り組んだ点に、本論文の独創性および重要性を認めることができる。また、医師の症例報告や肉親の手記などのテキストを丁寧かつ丹念に読み込みながら、子どものスピリチュアリティをめぐる概念構成に照らして説得力ある仮説を導出している。研究方法の妥当性、分析・考察の的確さ・周到さ、さらには記述の臨場感・迫真性という点においても、たいへん優れている。押しつけがましいところがないのに、一度読めば容易に忘れることのできない、大切な何かに目を開かせてくれる論文である。

なお、優秀論文賞および佳作となった6篇（7名）も、それぞれに内容の濃い、卒業論文としては十分に水準の高い力作であった。それぞれの問題意識を前面に出して、論文作成に全力で取り組んだ努力が実を結んでいると思う。受賞者の8名の学生諸君が、今回の受賞を励みとして、将来それぞれの道において大いに活躍されることに期待したい。

最優秀論文賞	卒 業 論 文 名
美馬 里彩 (藤井美和ゼミ)	終末期の子どものスピリチュアルニーズ ～ソーシャルワークの視点から家族へのケアを含めたトータルケア を目指して～
優秀論文賞	卒 業 論 文 名
古田菜津子 (宮原浩二郎ゼミ)	湯けむりの社交 ―銭湯の社会美―
近藤 郁美 (山上浩嗣ゼミ)	若者のセクシュアル・ヘルスをめぐって
伊藤 康貴 (三浦耕吉郎ゼミ)	「ひきこもり」の自分史 ―「ひきこもり」現象の社会学的考察―
王 麻美 (池埜聡ゼミ)	性的虐待被害者の長期的変容過程と成長 ―インタビュー調査による探索的研究を通して―
佳 作	卒 業 論 文 名
北村 義規 植山 慧士 (野波寛ゼミ)	希望が人に与える影響 ～個々人と夫婦関係の2つの場面を用いて～
宮本 晃一 (岡田弥生ゼミ)	謎多き小説『ロリータ』が愛され続ける理由 ～隠された作者の想いを探る～